



■ごあいさつ

このたび、新潟市湯東樋口記念美術館・湯東歴史民俗資料館の「NEWSLETTER」を発刊する運びとなりました。

1970年12月に、旧湯東村立の施設として第一歩を踏み出してから55年余。その間、さまざまな時代の波、世情の移ろいとともに、当館のありようも少しずつ変遷を経てきましたが、地域の歴史や文化を共有し再発見する場としての本質は、決して変わることはありません。

これからも末永く持続可能な「温故知新」「不易流行」の拠り所でありたい、との願いをこめて…。ささやかな発信ではありますが、この「NEWSLETTER」が、みなさまと当館とを結ぶ「かけ橋」となりましたら幸いです。

西蒲区文化施設を運営する市民の会、新潟市
(湯東樋口記念美術館・湯東歴史民俗資料館)



◆樋口記念美術館-始まりの遺構

始まりはこの小さな建物から。民俗資料館や物産館への転用を経て、現在は受付棟と一体化され「お茶の間美術館」として使われています。



◆持続可能な歩みを地域の人々とともに…

年に数回の展示替えは、湯東文化振興会に所属する市民ボランティアの方々と館職員が協働で作業を行っています。

■2025 年度に開催した展覧会

- 新潟ゆかりの書展—館蔵品を中心に—
- 金子孝信展—画帳 絵日記を加えて—
4/22~6/22
- 戦後 80 年 戦争展
- 新潟ゆかりの書展Ⅱ
7/5~8/31
- 尾竹三兄弟と教科書展
9/17~12/28 (※会期を延長)
- おひなさま展
- 安宅安五郎の画帖「世界玩具」と世界の玩具(おもちゃ)
1/24~3/29



■来館者の声 (アンケートから)

- ・モダンでオシャレな金子さんの作品に惹かれ、来館させていただきました。(50代)
- ・金子孝信の絵画や人生を通して平和についても改めて考えさせられる展示でした。(50代)
- ・戦時下の人々の使用していた物品等を実際に見る事が出来て大変興味深かった。(40代)
- ・実物の戦時の遺物を見て、改めて「本当に戦争があったんだ…」と思った。(20代以下)
- ・木版の教科書挿絵にも多くの方の努力があったのだと初めて知りました。(60代後半)
- ・時代の移り変わり、学校の毎日の生活も大変な変化をしてきたのがよくわかりました。(70代以上)
- ・三兄弟が挿絵に関わったことを起点に教科書の歴史を掘り下げた企画で興味深かった。(40代)
- ・たくさんの人形が展示されていて驚きました。保存状態にも頭が下がります。(60代前半)
- ・世界玩具、当時としては珍しい人形様々、安宅安五郎のスケッチも良かった。(50代)



👉 尾竹三兄弟と教科書展

母親が湯東(※当館の立地する西蒲区三方)の出身という所縁深い尾竹三兄弟(越堂、竹坡、國観)をフィーチャーするシリーズ展。彼らが挿画を手掛けた教科書を中心に、江戸時代から現代まで、学び舎で使われてきた様々な教材を、時代の移り変わりとともに展示しました。



👉 ギャラリートーク

当館では各展覧会でギャラリートークを実施。概ね1時間ほどかけて学芸員が展示解説を行っています。展覧会準備のウラ話や、展示資料に関するレアな話題などを交えた解説は毎回好評で、常連で参加する方もいらっしゃいます。(写真は「尾竹三兄弟と教科書展」のギャラリートークの様子)。



👉 おひなさま展

昨年度に引き続き、越後おひなさま保存研究会の協力により開催。江戸時代の享保雛や古今雛から現代のユニークな雛人形、そして地域の人々による手作りの吊るし雛まで。美術館と歴史民俗資料館の1Fが、雅やかな桃の節句飾りで埋め尽くされました。



👉 金子孝信の展示コーナーをリニューアル

2026年の年明けを節目に、戦没画家・金子孝信の常設展示コーナーを美術館の2Fへ移設。展示内容やキャプション等もあわせて装いを新たに。金子孝信が短い青春時代を過ごした東京銀座のレトロな雰囲気も、少しだけ添えてみました。



👉 ナイトミュージアム（9月27日に開催）

「秋の夜長」の恒例行事。開館時間を19:00まで延長、地域の市民グループや児童たちが描いた絵で作った「絵とうろう」にあかりを灯して飾りました。見馴れた施設がいつもと違う幽玄な雰囲気…。



👉 お茶の間美術館

受付棟奥の、まるで秘密基地(?)のような展示室、その名も「お茶の間美術館」。創作活動を行う地域の市民グループや児童たちの作品発表の場として随時活用。こちらの観覧は無料となっています。

◆これまでに開催した展覧会の図録を販売しています（以下は現時点の在庫一覧/各1冊1000円）

- ・甞れ 金子孝信生誕100年記念展/尾竹三兄弟屏風展（2015年度）
- ・会いたい故郷の画家 尾竹三兄弟・安宅安五郎（日本画）・金子孝信（2018年度）
- ・皇室・宮家・華族に愛でられた美術・工芸品展—樋口顕嗣コレクションより—（2019年度）
- ・街道を歩く～広重とともに～多色刷木版画「東海道五十三次」絵巻展（2020年度）
- ・没後80年 夭折の画家 金子孝信と遺作の全て（2021年度）
- ・吉原芳仙展（2022年度）
- ・実物とアートで楽しむ埴輪展（2022年度）
- ・安宅安五郎展—日本画から洋画へ—（2023年度）
- ・尾竹三兄弟と師弟展（2023年度）
- ・小松明展—越後憧憬—（2023年度）
- ・金子孝信と戦争展（2024年度）
- ・尾竹三兄弟三者三様展（2024年度）
- ・安宅安五郎の画帖「世界玩具」と世界の玩具（おもちゃ）（2025年度）



■所蔵品紹介

津上昌平（福岡県生／1897-1977）
《樋口顕嗣翁像》1953年作 ブロンズ

旧潟東村の名誉村民・樋口顕嗣氏の肖像彫刻。作者の津上昌平は、帝展等で活躍した彫刻家で、出身地の福岡県立美術館でも作品が複数点収蔵されています。この像は樋口氏67歳の時、東京都知事表彰を受けたことを記念し作られたものと考えられますが、没後10年の節目となる1989年に当地へ移設されました。以来、ゆかりの美術館の傍らでその行く末を見守るかのように佇んでいます。



■潟東ミュージアム・ヒストリー ①

新潟市潟東樋口記念美術館は、旧潟東村出身の事業家・樋口顕嗣氏（東京荏原青果創業者／1886～1979）からの美術品寄贈を機に、旧潟東村立の施設として1970年に開設されました。

また、同じ敷地内の潟東歴史民俗資料館は、ふるさと創生事業（正式名：自ら考え自ら行う地域づくり事業）により1991年に発展的に整備された施設で、地域の歴史、特に在りし日の鎧潟の記憶を伝える潟舟や漁具など、多くの文物を保存、常設展示しています。

※このコーナーでは、これまでの施設のあゆみを紐解きながらシリーズでご紹介していきます。

施設の沿革

- 1970年 12月 樋口記念美術館 OPEN
- 1972年 7月 美術館新築移転
(旧施設は民俗資料館に転用)
- 1991年 3月 歴史民俗資料館 OPEN
(旧施設は物産館に転用)
- 1995年 3月 美術館増築竣工
- 2003年 4月 文化・民俗ゾーン庭園整備事業竣工
7月 受付棟竣工
10月 美術館収蔵庫増築
- 2005年 3月 市町村合併で新潟市の施設となる

■2026年度の予定

- 新収蔵品・コレクション展
4/21～6/28
- 潟東（西蒲）地域の考古資料展
7/14～9/27
- 西蒲区ゆかりの作家・作品展
10/14～12/27
- おひなさま展
1/23～3/28

※以上の展覧会名は仮称です。



施設の最新情報は、新潟市西蒲区の公式ウェブサイトからご覧ください。

西蒲区 文化施設



発行：2026年4月

西蒲区文化施設を運営する市民の会、新潟市

新潟市 潟東樋口記念美術館・潟東歴史民俗資料館
〒959-0505

新潟市西蒲区三方92番地

TEL/FAX 0256-86-3444